

# 共同礼拝 棕櫚の主日

2024年3月24日(日) 午前10時30分

午後4時

司式 牧師 高橋和人

奏楽 佐藤裕子

前 奏

招 詞 詩 編 102編2～3節

讃 詠 546

主の祈り

聖 書

詩 編 31編6節 (旧861)

ルカによる福音書23章44～56節(新159)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 142

説 教 「主イエスの十字架の死」

牧師 姜 徑米

祈 禱

讃 美 歌 II182

献 金

頌 栄 541

祝 禱

後 奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。

礼拝は前の方から静かに着席しましょう。

## 3月の祈り

レント(受難節)の期間にあつて、主の御受難の持つ恵みが意識され、罪の贖いと悔い改めの信仰の歩みが整えられるように。

イースターを覚え、復活の主を仰ぎ、礼拝と信仰の生活を確かなものにする事ができるように。

教会総会が主の御心に導かれるように。

高齢や体調などにより礼拝に集うことがかなわないでいる兄弟姉妹たちを覚えて。

震災の地の教会と人々を覚えて。戦争と紛争の地に平和がもたらされるように。

## 今日の祈り

受難週を迎え、日々の信仰生活の主イエスの十字架への歩みを覚えて整えられ、主の御受難と死による贖いを信じる信仰を確かなものにできるように。

教会総会が、人の思いではなく、主の導きにより、御心に沿うものとされるように。

卒業、進級、新しい歩みに向かう人々が祝されるように。体調を心と体に弱さを負う人々に主が寄り添ってくださるように。

「主イエスの十字架の死」 姜 徑米

ルカによる福音書23章44～56節

十字架の死と復活の間の埋葬のことを思う時、思い起こすのは、「使徒信条」です。この信条を告白することで、教会は、主イエスの十字架の死と復活の間にあることを見つめてきました。

「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり」。「陰府にくだり」とあります。

この一言が、金曜日の十字架の死と埋葬、そして日曜日の復活、その間の土曜日のことを語っていま

す。人間の世界では、深い悲しみの中で主イエスの埋葬がなされ、それを丁寧により直すための備えがなされているその時に、主イエスは、陰府に降っておられました。

陰府というのは、死んだ人の行く所です。十字架で死んだ主イエスは、死んだ者の所に行って下さったのです。そしてその陰府から、神様の力によって復活させられました。十字架と復活の間の土曜日はこの「陰府にくだり」の日であると言えるのです。

「陰府にくだり」という使徒信条の言葉は、「ハイデルベルク信仰問答」の言葉からすると、「言い難い不安と苦痛と恐れ」、言い換えれば「地獄のような不安と痛み」を、肉体だけでなく、魂において引き受け、忍んで下さったことを語り示しています。

神の独り子、まことの神であられる主イエスが、私たちと同じ人間になり、私たちの罪を全て背負って十字架の苦しみと死を引き受けて下さった。その主イエスのへりくだりを言い表しているのが、「陰府にくだり」です。そして主イエスが「言い難い不安と苦痛と恐れ」を受けて下さったことで、私たちが、「地獄のような不安と痛み」から解放される、そういう救いが実現したのです。

この土曜日、安息日は、深い悲しみと絶望の日です。復活の喜びはまだ与えられていません。婦人たちは亡くなった主イエスのために何かをしたいと心から願っていますが、出来ることは何もなく、せめて丁寧に、心をこめて、遺体をもう一度埋葬し直すことだけを望みとしてこの一日を過ごしました。このような嘆き、苦しみ、悲しみを、主イエス・キリストがご自身の身に背負い、担い、引き受けて下さったのです。